
涙

立花透琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

涙

【ZPDF】

Z5429Z

【作者名】

立花透琉

【あらすじ】

女の子の友情を目指したお話です

最後に笑ったのはいつだろう
最後に泣いたのはいつだろう

それすらも覚えてないから…

きっと、自分なんてどうでもよいと思つてゐ
自分自身が一番自分に無関心

だから、どうでも良いのだ

他人のことも
身内のこととも
自分のことも

「笑わなきや良いのに…」

そう言つられて、私は飲んでいたコーヒーから口を離した。

「笑いたくもないなら、笑わなきや良いのに」

そう言つた彼女は、つまらなそうに田の前のポテトを摘んだ。

「笑いたくないなんて…そんなことないけど？」
私は彼女に言つた。

確かに笑いたいとも思わなかつた
笑える出来事なんて無かつたし…

でも笑顔でいた

皆が笑つてゐるから…

笑えば良いのだと、笑みを顔に浮かべていた

そつすれば、周囲も何も言わなかつた

「私、楽しくなさそう？」

「楽しそうよ」

「じゃあ、なんでそんな事言つのよ」

彼女は幼い頃から一緒にいる。

家が近所で、親が仲良かつたから

だから当たり前に一緒にいた

彼女も周りと一緒に、普通に会話して
毎日を過ごして、ただそれだけだつた。

だから、いきなりこんな事を言われてビックリした

「楽しそうに見せてるだけに見えたから」

「…何…それ」

「そのまんま。演技にも見えないけど、本心にも見えない」

歯に物着せぬ言い方とは、いついついつとを言つのだらう

「あんたがどう感じて笑ってるかなんて誰にも分からないけど、見てる限りじゃ楽しそうに見えないだけ」

「楽しいわよ」

「そう。じゃ、怒れば良いでしょ。私にこんな事言われて腹立たない？」

淡々という彼女に、私は腹も立たなかつた。

多分、言われたことは真実だし

そのことで怒る必要も無かつたし…

けれど、気持ちが乱れた

何故だろ?…

「腹も立たないの?」

何も言わない私の顔をのぞき込む彼女の表情から、何も伝わってこない

- - - - - なにが言いたいの?
- - - - - 私にどうして欲しいの?
- - - - - 真意を知つてどうするの?

心が乱れる
胸の奥がざわつく

ワタシハ.....ドウスレバ...イイノ?

「何か言ってよ」
私の腕を彼女が突つつく。

私はただ、冷めた飲みかけのコーヒーに視線を落とすだけ。

- - - - - 何も言えない
- - - - - 何を言えば良いのか分からぬ

せめて、彼女の言いたいことが分かれれば、希望する言葉が見つけられるのに…

「だんまり？」

彼女の大きなため息が、耳につく。

沈黙が続いた

自分の心臓の音だけが響いている気がする。

ふつと…涙が頬を伝つた

涙なんて枯れたと思っていたのに…

「泣いた」

沈黙を破ったのは彼女。

その言葉に、私は顔をあげた。

彼女の視線とかち合う。

「泣いたね」

そう言つた彼女の瞳が微笑んでいた。

感情のある彼女の笑いに、私の涙は止まる)ことを泣けてしまつたらいい。

「傷ついた?」

「…………」

私は首を横に振る。

傷ついたかなんて分からない

ただ、怖かった

表情が、感情がない彼女が、何を考えているか分からなくてどうしたら良いのか分からなくて

ただ…怖かつただけ

「ごめんね」

彼女の謝罪の意味が分からず、私は彼女を見つめた。

「ごめんね。でも、イヤだったから…」

「何、が?」

「あんたが、このまま何の感情も感じないのが…」

「…………」

「その方が楽だつて知つてるよ。感情を無くしてしまえば、辛さを感じない。あんたの両親が亡くなつて…辛い日々を過いでるのがイヤで、だから何も感じなくすれば楽なんだつて…」

私は目を見開いた

私が気付きたく無かつた全てを、彼女が言葉にしようとしている…

「楽しいことも辛い事も、感じなければ楽だよね。作り物の感情を
顔に張り付けてさ…。相手の望む反応をすれば、何も失わずにすむ
よね…」

「…い、…やだ」

「でも、それじゃ意味が無いでしょ?」

私でも知りたくなかつた心の奥底を、彼女が口にする。

「そんな風に逃げてるだけで、何が残るの?」

「…私は…」

「そうやって生きて…それがあなたの何になるの?失わない事が良
いこと?自分に合わなくても、表面だけ繕つても、それで満足なの
?」

「……………だけど、私は…………もう、イヤなの…」

幼い頃、両親を亡くした。

当たり前のようにあつたはずの【明日】が突然なくなつた。

その事実に耐え切れなくて、自分がどうにかなつてしまふんじゃな
いかと思つた。

イッソ、コワコレテシマエバ…ラクナノニ…

心の中で囁く。

ナニモ、カンジナケレバ…ラクニナレル

笑顔を貼り付けて、悲しそうに俯いて…周りに会わせていれば誰も失わなかつたし、自分も楽だつた。

無関心になれば、辛いことも何もないと思つた

「私はつ…全て受け入れるほど強くない！」
初めて、声を荒げた。

「もう、何かを失うのがイヤなの！辛い思いしたくないの…それがいけないこと？誰かに迷惑かけた？私自身のことなんだから放つておいてくれていいでしょ…！そつとしておいて。何も言わないで！これ以上、踏み込んでこないでよ…！」

一気に捲くし立てる。

全てを拒否するよつ。

今まで失っていた感情が噴出すよつ。

こんなに叫んだのは始めてだった。

私は肩で息をして、そのまま正面を見据えた。

…………「それで、おしまい

また自分の殻を作ればいい
もう一度、自分の感情は押し殺してしまえばいい

けれど、やうはさせてくれなかつた

「放つておかないわよ。どんなに怒られたって、嫌われたってそれがあんたの感情なんだから、私は踏み込んでいくわよ」

「……なつ……」

「言つたでしょ? イヤなんだって。昔みたいに、一緒に笑つて泣いて……嫌なことも沢山あつたけど、それでも乗り越えてきたように。いろんな事感じて生きて欲しいの」

「…………」

「どんなに醜い感情だつて、受け入れてやるわよ。あんたが嫌な人間だつて、離れていきやしないわ」

勝ち誇つたように笑う彼女に、私は何も言えなくなつた。

「いきなりじやなくつていい。少しずつでいいから、自分の感情を外に出して」「らんよ。それで失うものがあつたつて、大丈夫だから

……」

「私は、失うのはイヤだ……」

「だったら、私が一緒に辛さを感じてあげる。人形みたいなあんたを見続けるよりもずっとその方が楽だわ。……そうでしょう?」

そりやつて笑う彼女は、私には無い笑顔がある。

私も…いつかこんな風に笑えるかな？

本当に心から笑える日が、来るのかな？

踏み出すのは怖いけれど…また失うものがあるのかと思いつら思ひも
うになるけれど

でも、心のそこから笑えるのは気持ちが良いんだと思つ

田の前の彼女を見ているとそりやつて思える。

不思議だね…

今まで感じなかつた感情が、次々をあふれ出す。

うん

彼女の言ひとおり、少しずつ…少しずつ、いろんなものを感じよつ

それが辛くとも、悲しくても
何も感じないよりかずつと良い

辛くて、悲しくて…だからじやせつと感じる幸せがある。

だから - - - -

「ありがとう」

そう歎いて、私はぎこちなく笑つた。

(後書き)

感情ばかりを全面に出してしまったのですが
なんとなく、そういう話を書きたかった気分でした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5429n/>

涙

2010年10月9日05時53分発行